生涯モデルの転換―山型から高原型へ―

平成 28 年 6 月 8 日

山本恒夫

登録関係事項
登録日　2016 年 9 月 19 日
掲載場所　日本生涯教育学会 生涯学習実践研究所
プラチナ e 資料館「論文・報告」
URL　http://lifelong-center.jimdo.com/

実践研究所研究会資料
2016・6・8

生涯モデルの転換―山型から高原型へ―

山本恒夫

人生 50 年、60 年の時代には、人の一生を山型（図 1）でとらえていたのではないだろうか。人生の前半は登り坂で、人生の準備期間を経て、働いたり、子育てをしたりし、人生の半ばでピークを迎える。後半生は下り坂で、最後の方で引退し、短い余生で終わる。このような生涯モデルが社会的通念として人生 80 年代になっても尾を引き、今日まで引きずってきているように思われる。

しかし、超高齢時代では、そのような通念も変えざるをえないのではないだろうか。これからは、山型の生涯モデルではなく高原型（図 2）のモデルで生涯を考えるということになっていくであろうが、今後の高齢化率の予測からすると、そのような転換は急速に進むに違いない

高原型モデルの場合には、人生の初期に社会的活動力を身につけ、成人となってさまざまな活動を始める。そして、長期にわたって高原状態で活動を続ける。引退は人生のかなり遅い時期になるであろうが、引退後もまだかなり長い時間がある。

人生の後半になれば、体力や記憶力をはじめ、衰えるところも出てくるが、これからの時代には、それを人工知能やロボットでカバーしたり、レジリエンス(回復力)の学習で回復・成長を図ったりするようになるであろう。

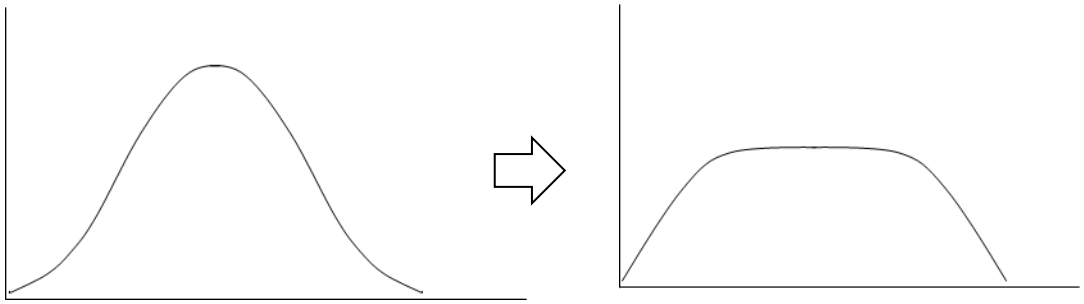
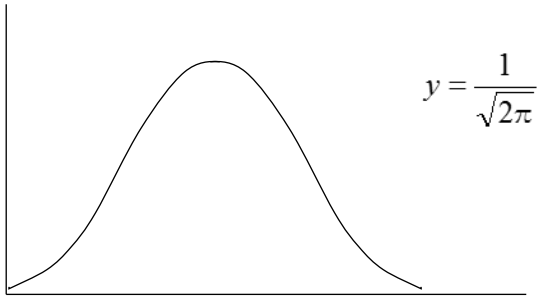


図 1　山型　　図 2　高原型

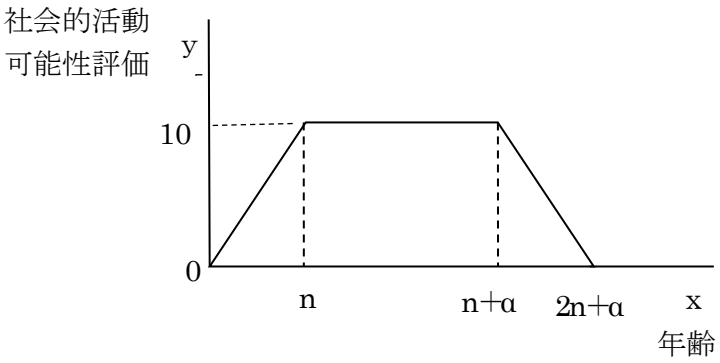
山型から高原型への生涯モデルの転換

山型は正現分布型(確率曲線)で説明でき(図 3)、高原型は台形型で説明できる(図 4)。図 4 のよこ軸は年齢で、たて軸は社会的活動可能性についての社会的評価である。図 4 では、広く一般に社会的活動可能性「あり」とされる評価を 10 としてある。



$$y = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \exp(-\frac{x^2}{2})$$

図 3　正規分布型



$$y = \frac{10}{n} x \qquad 0 \le x \le n$$

$$y = 10 \qquad n < x \le (n + \alpha)$$

$$y = -\frac{10}{n} x + \frac{10a}{n} + 20 \qquad (n + a) < x$$

図 4　台形型

今のところ、我が国では、独立した成人として認められるのがほぼ 20 歳なので、図 4 のモデルで、ｎ=20 とし、その後の社会での活動期間を 50 年すると、引退は 70 歳、人生の終わりが 90 歳という生涯モデルを得ることができる(図 5)。

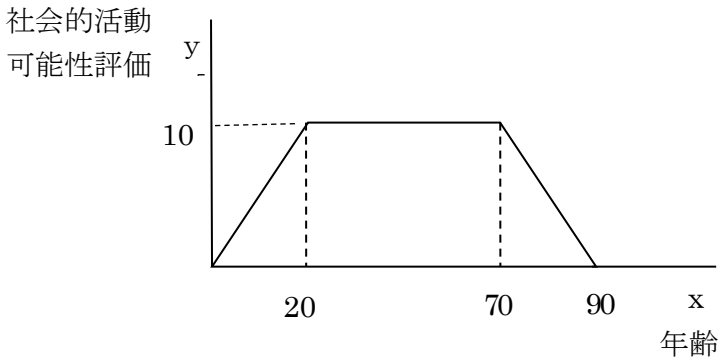


図 5　　我が国の高原型生涯モデル